

交流文化

立教大学観光学部編集

2013.
volume

14

14
交流文化

特集
巡礼



特集
巡礼

立教大学観光学部

交流文化 14 ©2013
立教大学観光学部

ISBN 978-4-9905878-0-2

特集

02 巡礼

04 観光と巡礼

門田岳久

14 聖地サンティアゴ・デ・コンポステラの現在

—巡礼と観光をめぐる素描

内藤順子

26 「交流文化」フィールドノート① エコツーリズムによる

宮古市の震災復興支援

—1000年の絆を紡ぐ宝探し調査—

橋本研究室

34 キリシタンと 現代の教会巡礼

—長崎の文化層序と観光商品化

佐藤大祐

42 読書案内 『聖地巡礼ツーリズム』

『巡礼ツーリズムの民族誌』

44 最近の講演会から 日韓における「海女観光」の現状

中山大学旅遊学院（観光学部）の教育





[特集]

巡

巡礼はこれまで聖地を巡るといふ宗教的行為ともうぼらとらえられてきた。しかし、今日、「パワースポット」や「アヌ聖地」の巡礼といった現象が話題となり、また信仰と深く結びつけられてきた四国遍路やスペインのサンティアゴ・デ・コンポステラの巡礼などが多くの一般観光者たちに注目されている。伝統的、宗教的とされてきた巡礼は、現代の社会において観光とのかかわりをこれまで以上に深めている。本特集では、この巡礼と観光とのさまじまな結びつきを近年の内外の動きに探ってみた。

礼

観光と巡礼

文・写真 門田岳久

巡礼は本来、楽しみやレジャーのための旅ではない。
しかし、現実の巡礼には観光的な要素を含む。
日本を代表する巡礼地である四国遍路を例に、
「巡礼の観光化」を考える。



1 参拝客であふれる四国遍路第51番札所石手寺(愛媛県松山市) 2 手を繋ぐ巡礼者たち。バスの巡礼ツアーでは見知らぬ人たちが仲良くなることも 3 バスの巡礼ツアーの一回。先頭に立っているのが先達といわれる四国遍路の指導者 4 足を休める徒歩の巡礼者。徒歩の人は一人旅が多い 5 ツアーであっても歩く箇所がなくなるわけではない。石段に苦戦する巡礼者

はじめに

あらゆる宗教は、信仰上特別に意味づけられた場所を持っている。奇跡の起きた場所や教祖の生死の地、修行の地など理由はいろいろだが、それらは一般に聖地と呼ばれている。聖地に赴くことは信徒にとって重要な動機であり、信仰を深めるために聖地を訪れることを巡礼と呼んできた。

巡礼は移動すること自体が修行なので、本来は楽しみやレジャーのための旅つまり観光ではない。しかし現実の巡礼は多かれ少なかれ観光的な要素を含んでおり、宗教研究だけでなく観光研究の立場から考えることも可能である。以下では日本を代表する巡礼地である四国遍路(四国八十八カ所札所)を例に、「巡礼の観光化」を考えるための基本的な視点を紹介していきたい。

四国遍路の観光化

四国遍路は全長1300kmを超える巡礼路であり、四国を一周する沿道に「札所」と呼ばれる88の寺院がある。その一つ一つに参詣していくのが「お遍路さん」(巡礼者)である。起源は平安時代、真言宗の開祖・弘法大師空

海が修行した道のりだといわれているが、現在のルートが確立され庶民層にまで広がったのは概ね18世紀だとされている。近世においては庶民の宗教的実践として、西日本一帯から巡礼者を集めていたという。徒歩で廻ると成人男性の足でも優に50日は要する長い巡礼地である。苦難の多い四国遍路に行くことは俗世からの「死」を意味し、今でもその象徴として巡礼者は白衣(白装束)をまとっている。

四国遍路の役割は単に信仰を深めるとのことだけではない。近代以前には傷病者や生死のみぎわにある人、障害者など、「普通」の生き方をできなくなった人が流れ着く場でもあった。

たとえば名作として知られる松本清張の長編推理小説『砂の器』のシーンに、殺人を犯すことになったある青年文化人の知られざる過去が回想される場面がある。それは青年が幼少時、ハンセン病を患う父親に連れられて四国へ巡礼の旅に出るというものである。その後の人生を送る中で青年は別の名を名乗り、ハンセン病者の子であるという過去を消し去って生きてきたのだが、1974年の映画版では父子が四国を巡る場面に悲壮なBGMが流れ、そのことが余計に、差別ゆえ

に過酷な旅に追いやられた彼らの苦境を際立たせている。

なぜそこまでして彼らは悲痛な旅路を行くのだろうか、と思わせる演出である。しかし旅に出なければその父子には、より過酷な生活が待っていたはずであり、巡礼の旅は彼らにとって救いを求めた行為だったのかもしれない。伝統的な四国遍路はこのように「死」のにおいを少なからず伴い、必ずしもプラスの意味合いばかりではなかった。

とはいえ、長く「業の病」と差別されたハンセン病も、医学の発達や法改正によって通常の病と同様の治療が可能となり、やむに已まれず巡礼の旅にでなければならぬ時代ではなくなった。現在の四国遍路ではそのような巡礼者は皆無となり、かつてのような暗いイメージはすっかりなくなったといつてよい。代わって多くを占めるようになったのは、お参りをしながらしつかり観光も楽しむような、巡礼と観光との境目の人々である。観光と一体化した巡礼のことを、私は「巡礼ツーリズム」と呼んでいる。そもそも巡礼は移動や宿泊が不可欠であるため、交通網や観光関連産業の発達は、必然的に巡礼の観光化を促した。



1 四国遍路では参拝の証として、納経帳といわれる帳面に寺ごとの御朱印が押される。この帳面を完成させることが達成感をもたらす 2 四国遍路礼所の駐車場に並ぶツアーバス。一時期より減少したとはいえ、高齢者を中心にバスツアーの人気は根強い 3 高野山（和歌山県）の宿坊での食事メニュー（精進料理） 4 大きな礼所や店では巡礼者向けのお土産もたくさん売られている 5 四国遍路最後の礼所、大窪寺では観光地ながら記念撮影が行われる

四国遍路の観光化を一気にすすめたのは、第二次世界大戦後の団体バスを利用した巡礼ツアーの誕生である。最初に始めたのは愛媛県松山市にある伊予鉄道という鉄道会社の旅行部門である。当初は高野山金剛峰寺にある信徒名簿を参考にダイレクトメールを送ったり、四国近辺からハワイに移住した日系移民1世に「里帰り」のようなかたちのお参りの旅を提案したりと、顧客獲得に奔走したという。だが2週間足らずで参拝を終えることができるとあって、それまで巡礼に出るの思いとどまっていた比較的高齢の人々を誘い込み商業的成功を取めた。それをきっかけに四国の鉄道会社・バス会社がこぞって参入し、続いてタクシー会社、瀬戸大橋などの開通を機に陸で繋がった関西圏の大手旅行会社が続々と参入することになった。こうして四国遍路は近代観光の仕組みと密接に結び付くことになったのである。

よりやや若く、40〜60代が中心を占めている。更に近年は、数としては少ないが「歩き遍路」と呼ばれる徒歩での巡礼者が復活の兆しを見せている。世代としてはより一層若く、女性や外国人も珍しくない。1990年代末以降、四国遍路は雑誌やテレビを通じて情報を得た若い世代が、個人や親しい少人数で行っており、2000年前後には大きなブームとなった。以上のように四国遍路は修行や救いを求める伝統的な旅から、近代観光の一種として「楽しみつつお参りする」旅へと大きく変化した。――というところで、巡礼本来の宗教性が形骸化し、ただのイベントになってしまったかのような印象を与えるかもしれない。だが後に述べるように移動や宿泊の形が観光化したからといって、一概に無宗教になったわけでもない。このことを理解するため、ここで現代宗教を捉えるための基本的な考え方を参照したい。

ポスト世俗化と巡礼の復活

時代の変化のなかで宗教の存在感や役割はどう変化するか。社会科学では、近代化とともに宗教は廃れていくと考えられてきた。ドイツの有名な社会学者マックス・ウェーバーが述べたように、宗教というものは近代の初期に資本主義社会の基礎を作るために大いに役立ったのだが、いざ資本主義ができあがり近代へと時代が突入していくと、人々はなにことも合理的に考えるようになり、社会は急速に「脱呪術化」されていく。日曜だというのに教会の礼拝に参加する人は少なくなるし、政治と宗教は明確に分離され、社会全般に対する宗教の影響力が落ちていくのだという。宗教社会学ではこのような現象を「世俗化」と呼んできた。宗教は人々が生きるうえでの行動指針ではなくなり、社会は「俗っぽく」なったのだ、という考え方である。しかし1980年代頃から世俗化という考えは再考を迫られつつある。衰退するだけかと思われた宗教が、世界各地で復活してきたのである。先進国では占いやセラピー、新宗教の興隆。途上国においては宗教教育やイスラーム主義のような公共宗教が再び力を持ちはじめた。またユネスコ世界文化遺産に教会や聖地が含まれ、多くの参詣者ツーリストが訪れるようになっていく。近年では近代的な医療に、宗教的なケアを組み合わせるような取り組みもなされている。このような宗教復活は「ポスト世俗化」と呼ばれている。

巡礼はまさにポスト世俗化の好例である。つまり世界各地で伝統的な巡礼地が再び盛り上がりつつあるのである。例えばスペイン北西部のカトリックの聖地、サンティアゴ・デ・コンポステラでは、1993年の世界文化遺産登録を契機に巡礼者数が増加し始め、6年に一度の聖ヤコブ年という年を経るごとにまさに右肩上がりとなっている。

だからといって、かつての聖人信仰がそのまま復活したというわけではない。宗教社会学者の岡本亮輔によれば、現在同地を訪れる巡礼者の多くは決して伝統的な意味でのカトリック信者ではないという。つまり、毎週教会に通い正しい信仰のありかたを磨いてきた敬虔なクリスチャンではなく、むしろ日頃はあまり宗教に興味のない、ヨーロッパを中心に世界から集まった「ごく普通の若者」である。彼らは発展しきった都市での日常生活に嫌気がさし、徒歩で聖地を目指しながら他の巡礼者や沿道の人々との交流を行い、歩くという前近代的な交通手段をあえて採ることで非日常性を感じ取っているのである。

おもしろいのは、現代の四国遍路を行っている人の多くがサンティアゴ巡礼の巡礼者と同じような考えを持っている点だ。要するに「現代巡礼の最大の特色である。便利さや快適さであふれた日頃の生活を脱し、敢えて苦勞の多い巡礼の旅を行い、時に足腰に強い痛みを与えつつ、また時に自らの来し方行く末を思念しながら瞑想を行う巡礼地での彼らの経験は、他の手段ではなかなか得られるものではない。また巡礼ツアーの中では巡礼者が奇跡に出遭うことが多々ある。例えば長い巡礼の旅が終わわりカタルシスを味わう中で、目の前に死んだ者の姿が現れ、自らに語りかけるといった超常現象である。こうした奇跡譚は、現代巡礼が巡礼者の心身にいかに刻み込まれる経験であるかを伝えてくれる。

彼らは弘法大師空海に帰依しているわけではなく、仏道を身を投じるため修行しようとしているわけでもない。その意味では確かに「無信仰」である。しかし心や内面が大きく変化する巡礼者たちの旅は、科学や合理性に回収しきれない経験であり、そのような意味

に、みんな「無信仰」を標榜しているのである。ここでいう「無信仰」とは修行や供養、弘法大師信仰といった四国遍路伝統の宗教的裏付けを持たないという意味であるが、バスにせよ、自家用車や徒歩にせよ、現代巡礼に参加する多くの人はかつてと同じような意味で信仰を有しているとはいいたい。

消費される宗教？

近年の新たな巡礼ブームでは、旅行会社が商品化したリメディアを通じてイメージが広がったりと、一見通常の観光旅行と同じような展開が見られる。そして参加者も自分の意識としては「無信仰」であるという人が少なくない。この点をとると、確かに巡礼は宗教性を完全になくし、観光一辺倒になったのではないかという疑問を持つてしまう。ポスト世俗化時代の宗教研究では、このように一見したところ宗教ではなくなりつつある現象が、果たして本当に宗教性を抜きに成り立っている現象なのかと問いかけてきた。

その一環として、最近私は現代巡礼に関するエスノグラフィ（民族誌）を出版する機会を持ったのだが、その本の副題に「消費される宗教経験」と入れた。「消費」という言

では、宗教的な経験であるといってもいいのではないだろうか。

「心の旅」と新しい観光

このような心や内面の変化が期待される旅は、旧来型の大衆観光にはそれほど見られるものではなかった。長く国内観光の主流を占めてきた観光のタイプは、「見る」「食べる」「買う」にポイントを置き、かつ短時間で名所訪問を次々にこなすために観光対象に深くコミットしない傾向を持っていた。つまりツアーリストは観光資源を次々に消費（消費）してきたといってもあながち間違いではない。

それと比較した場合、現代的な巡礼は大きく異なっている。まず巡礼者が経験する旅の出来事は規格化された旧来型の観光と異なり、生き方や内面をえぐるような予測不可能なものである。なおかつ他の巡礼者や沿道の人々との交流は、ホスト／ゲストという立場が明確に分離した旧来型の観光とも異なる様相を見せるものである。

内面重視の観光では旅を通じて自分の中に何かを残す、ということがポイントとなってくる。巡礼ツアーリズムの場合「何か」に相当するものは、例えば「人生の回顧」や「信じ

葉がもつインパクトの強さゆえに、多少の語弊を承知で敢えて付けたものである。「伝統宗教がツアーリズムの中で消費されている」と言うとき、多くの人は残念さを覚えたり、場合によってはけしからんと考えたりする。なぜなら消費という言葉は「資源を使い尽くした後にも残らない」というようなニュアンスを伴っているからである。だから巡礼ツアーで宗教経験が消費されるというと、巡礼者は信仰を積み重ねることなく、利根的な観光ばかりを楽しむ観光客に墮してしまったのではないかと、というイメージを生み出す。

しかし実際には必ずしもそうではない。例えばバスで行われるツアーには「先達」と呼ばれる、霊場会（寺院の合同組織）公認の先導役が同行し、巡礼者を案内する。私はそうしたツアーに何度か同行して取材したが、ツアー参加者は先達を手本に、実に熱心にお参りをしようとする。それは先達の同行しない自家用車や徒歩での巡礼者も同様で、ほとんどの巡礼者がたどったとしいながらも読経をきちんに行い、宿坊（寺院附設の宿泊所）では早朝に起きて「お勤め」をする。また徒歩巡礼者は困難な道のりを延々歩くことを厭わず、金剛杖と呼ばれる細い木の杖を頼りに、体力

ること、「身体の痛み」や「奇跡」など、巡礼で果たされる各種の経験である。こうした経験はその場その場で消費されていくわけではなく、確実に巡礼者の心や身体に残り続けるものとなる。

近年観光の私たちはますます多様化し、巡礼ツアーリズムのような内面重視の「心の旅」のニーズは明らかに高まっている。たとえば心身の健康を回復する旅であるヘルスツーリズム、神聖な体験を行うことを目的とするスピリチュアルツーリズム、他者に尽くすやりがいによって自らの存在意義を再確認するボランティアツーリズムなど、いくつもの類型を挙げることができる。かつて観光は、「お伊勢参り」のような宗教的な物見遊山から離れ、純粹なレジャーとなることで近代化を果たしてきた。いわば観光の世俗化である。しかし今、観光は再び「宗教的なもの」と接近すること、可能性を広げつつある。観光研究においても、巡礼という古くて新しい主題を改めて位置付け直す時期に来ている。



6



1



2



3



5



7



4

参考文献
 門田岳久 2013『巡礼ツーリズムの民族誌—消費される宗教経験』森話社
 岡本亮輔 2012『聖地と祈りの宗教社会学—巡礼ツーリズムが生み出す共同性』春風社
 マックス・ウェーバー (大塚久雄訳) 1989『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店

1 2 ホーチミン廟に詣でる人の行列。ベトナムの人にとってはこれも一種の巡礼である 3 恋愛成就の神様として若い女性に人気のある箱根九頭龍神社。パワースポットブームに押されて知名度を上げた 4 ハンブルクの教会前に新たに作られた巡礼者用の立て札。ドイツでは古い巡礼路を復興する取り組みがみられる。サンティアゴまで2500kmとある 5 沖縄の聖地、斎場御嶽(せーふあうたき)。親族集団「門中」の巡礼地であったが、世界遺産指定後は全国から観光客が急増している 6 7 ミャンマー内陸部、インレイ湖畔にあるフアンドーウ・バゴダ。お祭りの日とあって巡礼者でごったがえしている

ヨーロッパのカトリック巡礼は、時代ごとの価値観や社会状況で盛衰を繰り返してきた。今日、巡礼は観光と不可分のものとなっている。現在における巡礼の成り立ちと「観光化」について、スペイン・カトリックの聖地サンティアゴ・デ・コンポステラとその巡礼を例に素描する。

聖地サンティアゴ・デ・コンポステラの現在

— 巡礼と観光をめぐる素描

文・写真 内藤順子

Santiago de Compostela



サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂入口から空を望む

カトリック巡礼と観光

ヨーロッパにおけるカトリック巡礼の実践は、中世以来、その国や地域の政治的・宗教的な事情や人びとの心もちによって盛衰を繰り返し、また、繰り返させられてきた。いいかえれば、巡礼は、時代ごとの価値観や社会的な状況によって大流行することもあれば、忘れ去られることもあった。カトリック信徒が神や聖人を想いながら長い道程を歩いて心身に試練を課すような、信仰に根ざす実践を「正式な巡礼」と位置づけられるなら、「不純な動機」での巡礼や、異教徒の巡礼を歓迎することや、巡礼聖地を観光化することは、宗教と世俗が共存するという意味で「脱世俗化」としてとらえられる。しかし、「巡礼者はなかば巡礼者」(Turner, 1978) なのであり、そもそも巡礼は行為者本人にとっても旅と切り離せるものではなく、目的地としての聖地が万人にひらかれているいま、巡礼と観光はますます不可分のものとなっている。

現在の徒歩または自転車による巡礼は、自分探し、誰かの弔い、精神鍛錬や健康促進、人が巡礼をする理由を知るため、ひとりに

なつて考えたくて、世界遺産だから、といった様々な動機で行われている。たとえばカトリックの洗礼を受けているスペイン人大学生が、仲間との交流を深めることを主目的とした「ちよつとハードなイベント企画」として巡礼するのは珍しいことではないし、夏休みごとに巡礼路を少しずつ断続的に歩くことも一般化している(筆者調査, 2013年)。いっぽうで聖地の側も、カトリックであるかどうかはさておいて、あまねく人の巡礼の動機を引きだすようなアピールをはじめ、観光者を惹きつけて呼び込むための快適な環境の整備やシステムづくりの努力をしている。

本稿では、スペイン・カトリックの聖地サンティアゴ・デ・コンポステラとその巡礼(El Camino)を例として、こうした現代の巡礼の成り立ちと「観光(資源)化」について素描する。

サンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼の

概観

聖なる場所(「聖地」)を訪れる宗教的行為、それが巡礼である。聖地であることの明確な定義はなく、カトリックの場合ほとんどに聖人の奇譚や聖遺物との関連を背景に成立し、聖なるものを求めて人が集まるところが聖地と



サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂

なる。パチカン、エルサレムとならんでカトリック三大聖地のひとつとされるサンティアゴ・デ・コンポステラは、セイント・ヤコブすなわちサンティアゴという名のとおり、9世紀にその地で聖ヤコブの遺骨が発見されたことに由来する聖地である。スペイン・カ

はもちろん、聖地であることすら忘れられてしまう。

その後、300年近く経った19世紀になつてようやく、現在のサンティアゴ大聖堂の祭壇が位置するあたりで遺骨が(再)発見され(たといわれている)、当時の法王レオ13世にそれ

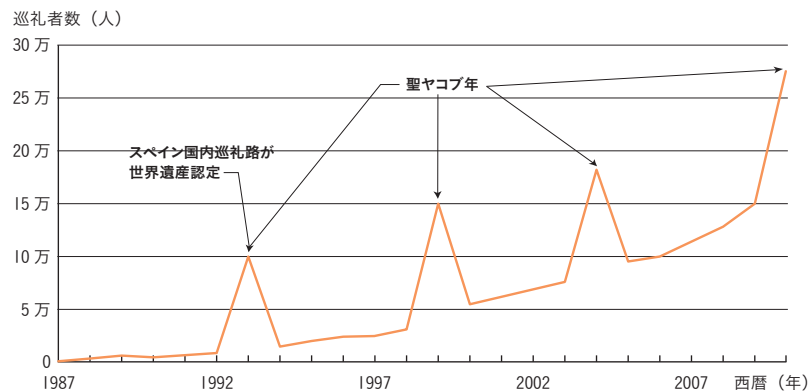


図 サンティアゴ巡礼者数の推移(岡本 2012:188より引用)

が聖ヤコブのものであると認定されると再び巡礼地としての威信を取り戻すに至る。それも東の間、1930年代のフランコ独裁下のスペインでカトリックの思想が政治利用されると、人びとのカトリックに対する不信感が著しく増大し、巡礼が行われることはほとんどなかった。内戦と世界大戦の混乱がおさまった1980年代に入ると、サンティアゴ・デ・コンポステラとスペイン・カトリック教会はあらためて積極的に観光と結びつくことで巡礼路の開発と復活の試みをはじめたのである。それが徐々にヨーロッパから浸透しはじめ、当時の社会主義政権の崩壊や日本でのバブル崩壊といった社会不安にさらされる個人が、情報化の中にあつて癒しや人生の転換をもとめて足を向けるようになる。加えて、巡礼を題材とした文学作品パウロ・コエリョの『星の巡礼』や、1993年の巡礼路(フランスの道・サン・ジャン・ピエ・ド・ポーからの約800km)の世界遺産登録など、いくつもの注目要素が登場するなか、1994年の「ヤコブの聖年」(訪れる誰もが罪を許される特別な年に飛躍的に巡礼者が増加し、右肩上がりでの現在の巡礼ブームへと続いている)。



3

3 サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂正面の「栄光の門」。2020年まで修復中 4 サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂内の中心に安置される聖ヤコブ。参拝者は背後から抱きしめることができる



2

1

1 サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂の頂にある聖ヤコブの巡礼像 2 サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂正面の「栄光の門」の聖ヤコブ



4

聖地サンティアゴ・デ・コンポステラの現在

ここまでみたとおり巡礼の流行は、信者の数や信仰心の強さに比例しない。そうした状況はカトリックからすれば嘆くべきことと捉えられがちだが、ある修道士は「巡礼観光の否定や、信仰の強さ云々の『巡礼の正当性』」

この1994年からの巡礼と観光客の増加は、地元の人びとの実感としてもはっきりと記憶されており、現在市内でタクシー運転手をしている男性はその波に乗って1995年にそれまでのチーズ加工業から運転手へと仕事を変え、一人娘を大学へ進学させられるほどの稼ぎを得られるようになったという。

1998年には「祈りの道」としてサンティアゴと日本の熊野古道は姉妹道提携を結び、国際観光共同プロモーションと銘打って宣伝も盛んに行い、日本からの巡礼も増えた。2012年1月にはサンティアゴ巡礼オフィス (Oficina Acogida al Peregrino) がFacebookに参加し、2013年からは毎日の巡礼の数をチェックできる公式ホームページを稼働しはじめするなど、いまではインターネットをつうじてあらゆる情報を集めることができる。また、巡礼経験者やまさに巡礼中の人のブログやTwitterも数多くみられ、それが世界規模で流布し、人生にちょっとした迷いを持っている人の自分探しや、定年をひかえた人の余生の巡礼への憧れと直結し、宗教的理由によらないあらたな巡礼を呼び込んでいる。

の議論は生産的ではない」と断言する。いまや僧侶も推進するその観光化に伴い、システムと環境の整備が進められ、確立されてきている。

システム整備のひとつには「巡礼手帳（クレデンシアル）」と「巡礼証明」の発行があげられるだろう。「巡礼手帳」は巡礼を行いたい誰でもが貰えるものであり、「異教徒歓迎」と明記されているだけでなく「異端者、怠け者、すべての者にひらかれている」とも書かれている場合が多い（発行所によって多少異なる）。また、手帳発行の際に簡単なアンケート記入があり、名前、国籍、パスポートナンバー、巡礼目的、巡礼手段、出発地、期間、宗教（カトリック、プロテスタント、スピリチュアル、その他）が問われる。つまり、宗教を問わず何人をも迎える前提で交付されていることがわかる。いっぽうで「巡礼証明」は「正式な巡礼」に対して与えられるものである。正式な巡礼とは、宗教上・信仰上の目的で徒歩100km以上、傷病者の場合は騎馬で100km以上、自転車の場合は200km以上の距離を巡礼してきたものとされる。巡礼完了のち「巡礼手帳」を提出すると、その日のミサにおいて巡礼の祝福（名前と出身地、出発地の読み上げ）

ブシしたことがあげられる。ヨーロッパ系大手航空会社のみならず格安航空会社も乗り入れ、フランス、ドイツ、イタリア、スイス、アイルランドなどのヨーロッパ10都市のほか、南米ベネズエラのカラカスからも国際線の直行便が飛んでいる。

聖地空間に生きること

雑多な余所者を相手にする聖地に暮らす人びとは、サービスマンとして客を選ぶことなく、訪ねてくる巡礼が異教徒であってもその待遇にほぼ変わりはないが、意識していな

を受けられる。宗教上の目的ではない場合は「歓迎証」が発行され、その区別の基準は明確ではないが、異教徒の場合には原則としてこれを受け取るようになる。もうひとつ巡礼の特典として、「巡礼証明」もしくは「歓迎証」があると、サンティアゴからの復路の交通手段（鉄道・航空機）の割引が受けられる。かつての巡礼には帰りの道行きがあったのだが、昨今の巡礼はもっぱら往路のみで完結してしまう。聖地側も、巡礼者の帰路についてはさほど関心もないようである。

環境整備の面では、巡礼路や巡礼宿の整備と、その施しまつわる暗黙の了解の確立があげられる。適度に歩きがいのある、整備しすぎていない、かといって荒野すぎない、徒歩に向く巡礼路を整え、サンティアゴ巡礼のシンボルマークであるホタテ貝をその道しるべとなるよう順路に散りばめる（21ページ写真1）。道中の巡礼宿（アルベルゲ）やホタテ貝を店先に掲げているレストランでは、巡礼者（巡礼手帳）を持参する者に無償（任意の寄付）または格安で部屋や食事を提供する。これは法律や条例で厳密に定められたものではなく、個人経営の場合にはあくまで聖地に住むホストの善意として、あるいは「功德」として、暗

いわけでもない。サンティアゴ市内の、とある巡礼宿では宿主が「イペリコ豚がなぜこんなに飼育されているか知っているか？ この巡礼の大地から豚肉嫌いの異教徒を追い払うためだ」と冗談めかして言い、その目の前では巡礼を終えたユダヤ教徒がハム抜きでオーダーした「モツアレラ」とイペリコハムのサンドワイドに開かれた聖地の日常のひとつまである。

先に、巡礼オフィスが定める正式な巡礼の条件をあげたが、人びとの実感としてはも

黙裡にしかし自然に行われているものである。また、ここ3年ほどはとくに、巡礼を行わずダイレクトに聖地にやってくる観光客をターゲットとした観光整備が続けられており、市内では観光スポットを巡回する汽車型の観光バスを走らせるようになった（21ページ写真2）。大聖堂のはす向かいにある国営ホテル・パラドールもそのひとつといえよう（21ページ写真3）。パラドールはスペイン観光政策の中心事業のひとつとして成功した観光資源であり、スペイン全国の旧い貴族の城や修道院などの歴史的建造物を改修して宿泊施設として再利用し、パラドールに泊まること自体の商品化を図ったブランドである。サンティアゴのパラドールは、1499年にカトリック両王によって建設された王立病院（巡礼救護施設）が前身となっており、全土に100近くあるパラドールのなかでも2つしかない最高級の5つ星を得ている。日本からサンティアゴに向かう観光商品には、「憧れの5つ星パラドールに泊まる」といった売り文句のツアーが数多くある。

もうひとつ重要なこととして、2011年10月にはそれまでの平屋建ての空港から一変して最新設備を備えた巨大な国際空港が

や信仰の有無よりも、自分の足または自転車で肉体的疲労を伴う道行きがあったかどうか、が「本当の巡礼」かどうかの基準のようである。苦勞のプロセスを経て憧れの地に到着することに重きが置かれ、それが醍醐味なのだ、と。そして巡礼者たちに



1



2



3



4

1 巡礼をサンティアゴへと導くホタテ貝の目印 2 サンティアゴ市内を巡回する観光バス 3 サンティアゴ・デ・コンポステラのパラドールReyes catolicos（カトリック両王）。5つ星の最高級の国営ホテル。かつては巡礼の救護院だった 4 サンティアゴ市内のみやげもの店。2010聖年の記念杖



1 サンティアゴ巡礼は目下、自転車巡礼（ピングリーノ/Bicigilno）の流行の目的地である 2 記念撮影をする、近郊の街から徒歩でやってきたスペイン人の高校生たち 3 オブラドイロ広場で中世のコスチュームで観光業（写真撮影サービス）を営む地元男性 4 サンティアゴ市内を歩く若い巡礼たち

やかつている」というのだ。巡礼の苦勞のプロセスを体現する者とそれを癒す者、その相互関係が現代の巡礼のありかたのひとつであり、そこに明確な信仰は介在していないかと思える。しかし、何がしかの聖性が人びとをつなぐ聖地空間のありかたが垣間見えてくる。

おわりに

さまざまな方法と方向から観光開発されたともいえるサンティアゴ・デ・コンポステラだが、毎日、たくさんの巡礼と思しき人びとがサンティアゴ大聖堂の前にひろがるオブラドイロ広場に佇んでいる。ある人は到着後に座り込んだまま聖ヤコブの像を見上げ、他方では同朋と記念撮影をしたりする姿が見受けられる。気の遠くなるような距離を歩いてきた人たちが目の前におり、願をかけたのか自然とそうなったのか伸びたままの髭や髪のか姿ではらはらと涙を流している。そこに観光客をたくさん乗せた観光バスが到着し、パレードル宿泊と大聖堂見学だけを目的としたアジアからの団体客が降りてくる。でも誰もが大聖堂の巨大さに圧倒されている。どこからか観光客相手のホタテ貝グッズ売りの老婆や、中世のコスチュームに身を包んだラッパ吹き

聞く限りにおいて、少なからず道中において神秘体験や人生の転機となる得難い経験をしたという。いっぽうで、巡礼を迎える人びともまた、結構な頻度で「説明がたい神聖さをまとった巡礼者があり、否応なく迎え入れの気にさせられる」といい、たんに商売だけ

ではない楽しみがあるらしい。ある巡礼宿の主人は「自分は生まれた時から聖地にいるから巡礼したことも、する気もないけれど、世界中から聖ヤコブのもとに人がやってくるのを迎えることが何より貴い、聖ヤコブと神への愛の示し方だと思う。ある意味で巡礼にあ



サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂

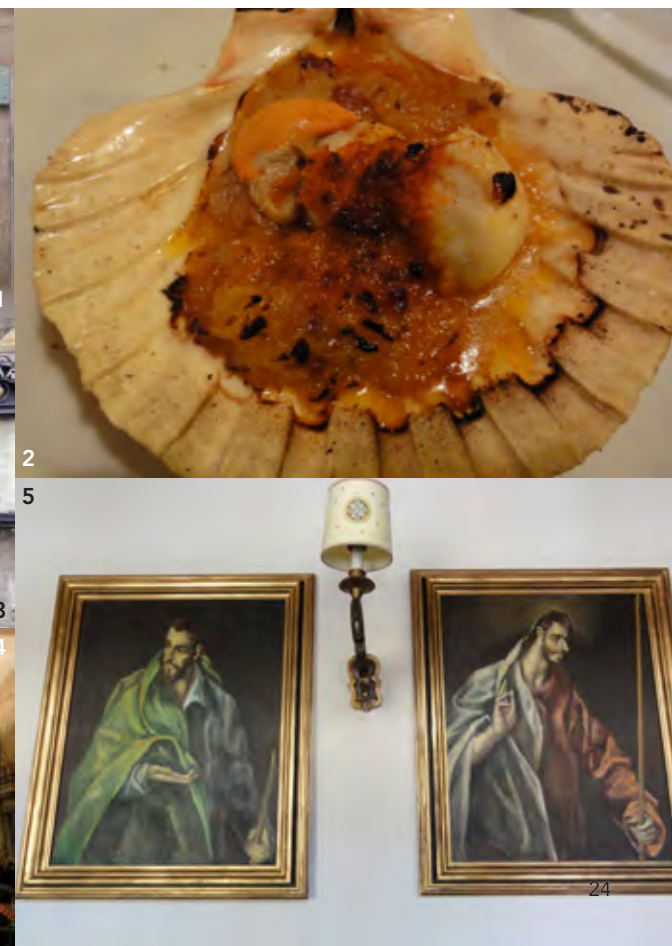
文献
 国立民族学博物館編 2007『聖地★巡礼：自分探しの旅へ』。
 岡本亮輔 2012『聖地と祈りの宗教社会学』春風社。
 TURNER, Victor & TURNER, Edith. 1995 (1978), *Image and Pilgrimage in Christian Culture: Anthropological Perspectives* (Lectures on the History of Religions, New Ser., No. 11) Columbia University Press.

参考
<http://www.camino-de-santiago.jp/about-santiago/toukeijouhou.html>

が現れる。そうした風景を日常として、いまだかつてないほどの巡礼と観光客を受け入れ、聖地サンティアゴ・デ・コンポステラは賑わっている。
 聖ヤコブは7世紀に殉死して列聖されたのち、十字軍の時代には異教徒を滅ぼしてカトリック教徒を救済するという奇跡の復活出現をしたとされている (Santiago Matamoros: ムーア人殺しの聖ヤコブ)。それ以来、カトリックにとっては異教徒からの守護聖人としてながらく敬われ、いまでもサンティアゴ大聖堂の向かいにある市役所の頂では、白馬に跨った聖ヤコブの彫像が異教徒を足蹴にして剣を振るっているのだが、時代が変わればその役割も変わる。いまは「サンティアゴ」が「聖ヤコブ」を意味することも知らないような異教徒が何万人も自分の墓を訪れて、ときに感激の涙を流しているようすを静かに見守っている。

1 サンティアゴ市内、自転車の巡礼者 2 パラドールの巡礼専用の食堂でふるまわれることがある、ホタテのタパス (つまみ) 3 サンティアゴ市内のレストラン。表にホタテの表示があるところは巡礼者に食事を無料もしくは格安で提供してくれる 4 巡礼を祝福するミサの様子 5 内は美術品が数多く飾られている。エル・グレコによる聖人画模写 (左が聖ヤコブ)

サンティアゴ・デ・コンポステラのパラドール中庭





1 天井のみ残されたガソリンスタンド 2 壊滅した田老地区の住宅街。津波は「万里の長城」といわれた巨大堤防をも乗り越えた 3 宮古港(1、2、3は2011年8月撮影) 4 津波の被害を受けた三陸海岸沿いの遊歩道の手すり 5 「これより先 津波浸水想定区域」

2011年3月11日に起きた東日本大震災は、「1000年に一度」、「未曾有」の大地震と繰り返し報道されてきた。しかし実際には、三陸沿岸はこれまで繰り返し大地震と大津波に遭遇してきた「津波常習地」である。それでも住民は、たびたび地震に見舞われることも地域の特性とし、子孫に伝えるべき知恵の一つに数えてこの地に住み続けてきた。「人びとが住み続ける」ことは重要な意味をもっている。住民が地域の誇りを連続と継承してきたことを意味するからである。今日の三陸沿岸地域があるのも、住み続けてきた土地への誇りが精神的な支えとなり、それが繰り返される大津波からの復興へ向かうエネルギーとなってきたのである。そう考える

と、住民が先祖から伝えられた「地域の宝」を、生きる力や文化として読み取り、コミュニティを再びつないでいくことが、今回の復興においても重要な鍵となるはずである。こうした問題意識にたち、私たちの調査チーム[※]は、岩手県宮古市で震災のなかで残された自然・生活文化・生業・技術等の「宝」を掘り起こし、それらを活かして、住民が参加できる被災地域の宝を核とした「地域復興プラン」を提案することを目的とした震災復興調査に取り組んできた。2011年にスタートしたこの調査プロジェクトにおいて、ゼミの学生有志たちは、文献調査、フィールド調査(被災地域の踏査と住民への聞き取り調査、地域復興プランとしてのウォーキングプログラムのサポート)において、欠かせない役割を果たしてきた。

宮古市では、三陸を代表する景勝地である名勝・浄土ヶ浜を有する観光地で、「スーパー堤防」で知られる田老地区も現在は宮古市に含まれている。文化面では、北は普代村から南は大槌町までを巡業するという、珍しい形態を今に伝える黒森神楽(国指定無形文化財)がある。漁業も盛んで、サンマや昆布の産地として名高いほか本州随一の鮭の生産量を誇る。初年度の2011年度は、8月に1週間かけて実施した「調査合宿」を皮切りに、繰り返し宮古市を訪れ、集中的な踏査とヒアリングを実施した。自然・生活文化・生業等の代表的な宝に着目し選定したヒアリング対象者は、宮古市商業観光課、観光協会、音楽関係者、

調査の主旨と目的

エコツーリズムによる 宮古市の震災復興支援 —1000年の絆を紡ぐ宝探し調査—

橋本研究室(観光学部観光学科)

橋本研究室では、2011年から東日本大震災で被災した岩手県宮古市の「地域の宝」を掘り起こす地域復興プランを提案することを目的とした調査に取り組んできた。以下、その活動を報告する。



宮古市でのフィールド調査

宮古市は、三陸を代表する景勝地である名勝・浄土ヶ浜を有する観光地で、「スーパー堤防」で知られる田老地区も現在は宮古市に含まれている。文化面では、北は普代村から南は大槌町までを巡業するという、珍しい形態を今に伝える黒森神楽(国指定無形文化財)がある。漁業も盛んで、サンマや昆布の産地として名高いほか本州随一の鮭の生産量を誇る。



1 魚菜市場にて 2 3 4 ヒアリング風景 5 過去の津波の教訓の碑（浄土ヶ浜）

農業・漁業関係者、食や自然、まちづくり関係者等、延べ27人にのぼる。

宝を活かした
ウォーキングコースの提案

2012年度には、前年度の調査成果をもとに、宝を活かした地域振興プランとして、ウォーキングイベントを企画した。黒森神楽と三陸の海岸地域という2つのテーマに沿ったコースとプログラム開発、ガイド育成と活用、実施のための組織づくりなどの要素を組み込んで実現したものである。学生たちは、7月のツアーコースの整備（旧参道の刈払い）、8月のイベント、10月の本番と、ツアーのサポート役として活躍した。

3年目となる本年は、黒森神楽の権現様獅子頭を祀る黒森神社の例大祭（7月21日）に合わせて、神楽を鑑賞できるウォーキングプログラムを実施した。主催は宮古市観光協会、ガイドは国立公園で働くパークボランティアなど、住民が主体となることを意識した企画である。今年も私たちは、本番2週間前のコース整備に参加し、地元の方々と連携をとりながら準備を進めてきた。市民には地元の良さを再認識する格好の機会となり、遠方からの

参加者にとつては、荘厳な雰囲気の中で繰り広げられる神楽を鑑賞できる貴重な体験が盛り込まれた質の高いプログラムとすべく準備を進めてきたが、参加者からは概ねそのような評価をしてもらえたようである。これからも地元の宝を活かした復興支援を、地元住民たちとともに考えていきたい。

2013年度は
裏磐梯で名高い北塩原村調査

この調査に参加したゼミ生たちは、地元の方々と一緒に作業をしたり、ツアー参加者と交流する機会に恵まれたりしてきたし、観光学部でもエコツーリズム論を担当いただいている海津ゆりえ先生（文教大学）の指導のもと、海洋研究室の学生たちと共同で調査する機会を得たことは何よりの経験となつているはずである。彼ら彼女らを見てみると、現場を繰り返し訪れ自分の眼で観て、震災復興への着実な足どりを全身で感じとり、土地のものを食しながら過ごすフィールドでの体験の一つひとつが血となり肉となり、心身ともにたくましく成長しているのを感じる。ゼミ生たちの調査結果の一部は、コースマップやフェノロジーカレンダー^{注2}として地元に戻され

ている。

なお、橋本研究室では、今年度から3年間かけて、「風評被害」を克服するためのフィールド調査を、裏磐梯で名高い福島県北塩原村で開始している。^{注3} こうした調査に参加するゼミ生たちの成長が、今から楽しみである。

注1 2011年度（日本観光研究会震災特別研究（エコツーリズムによる震災復興支援の実証的研究－岩手県宮古市における1000年の絆を紡ぐ宝探し調査）研究代表者：文教大学海津ゆりえ）、2012年度は日本エコツーリズム協会（JETS）、日本エコウォーク環境貢献機構（JECO）、JR東日本ウォータービジネス（二戸市（岩手県）の支援を得て推進され、2013年度からは文科省科学研究費（観光資源の持続的保全と利用を可能とする地域運営システムの応用研究）研究代表者：海津ゆりえ）の研究対象地域としている。

注2 フェノロジーとは生物学用語で「生物季節学」という意味である。対象となる生物を人や人の営みに展開すると、地域における自然・文化・行事・生業・食など多様なテーマに基づく暦を作ることができ、この暦を活用すると季節ごとの地域像が明らかとなり、地域の生活の疑似体験を構成することができ、その応用として季節ごとのきめ細かい地域の宝を発信する観光プログラムを作ることが可能となる。

注3 立教SFR東日本大震災復興支援関連研究（2013年度～15年度）「観光資源の持続的活用による風評被害の克服に関する研究」（研究代表者：橋本俊也）



学生たちの調査をもとに作成されたフェノロジーカレンダー。宮古市の観光協会や市内の寿司屋などで活用されている。

「宮古の宝」を掘り起こす



1 黒森神社 2 黒森神楽 3 モニターツアーで神楽鑑賞後、神楽衆とともに 4 宮古の伝統的な正月料理 5 賑わいを取り戻した浄土ヶ浜



現地での調査報告会の様子

私の調査内容は、主として地元住民の方々へのヒアリング調査でした。地元の人しか知らない料理や文化、習慣等の「宝」を地域住民の方と距離を縮めつつ、発掘していくことです。調査にあたって、いかに彼らの知識を引き出すか、いつも考えました。

宮古の方々の震災復興に対する、そしてエコツーリズムによる地域再構意欲により、調査をスムーズに行うことができ、地域の団結力に感服しました。私たちがこれからも継続的に調査に携わることで、宮古の復興、何より人々に間接的であれ貢献できればと考えています。

「地域の宝」を発掘する

山本陽太（観光学科4年）

「宝」を活かした地域振興プラン —エコウォーク(黒森神社／三陸海岸)



1 2
3 4



5

1 モニターツアーの受付 2 黒森神社境内での神楽鑑賞 3 4 パークボランティアによるガイド風景 5 津波が押し寄せて変貌した海岸地帯を歩く

未来を考えた行動の大切さ

後藤莉香（観光学科3年）

宮古調査に参加して、私は「未来を考えた行動の大切さ」を強く感じています。ヒアリング調査の中で、被災をした方々が皆、震災後すぐに何らかの行動を起こしていたと知りました。それは未来の自分や未来の地域のためです。その行動があつてこそ、復興に向かう今の宮古が存在していると気がきました。

と同時に、呑気な自分の大学生活をみつめ直すきっかけとなりました。未来の自分や周囲の人々のためにも、無駄な日は一日もないと痛感しています。宮古調査は、学問的知識のみならず、精神的にも私を成長させてくれました。



キリシタンと 現代の教会巡礼

長崎の文化層序と観光商品化

文・写真 佐藤大祐

近年、長崎県の教会やキリシタン史跡が観光商品化されている。背景には過疎化があるが、古来日本の玄関口だったこの地には400年を超えるキリシタンの歴史がある。教会への旅へと人々を駆り立てる動機とは何だろうか。

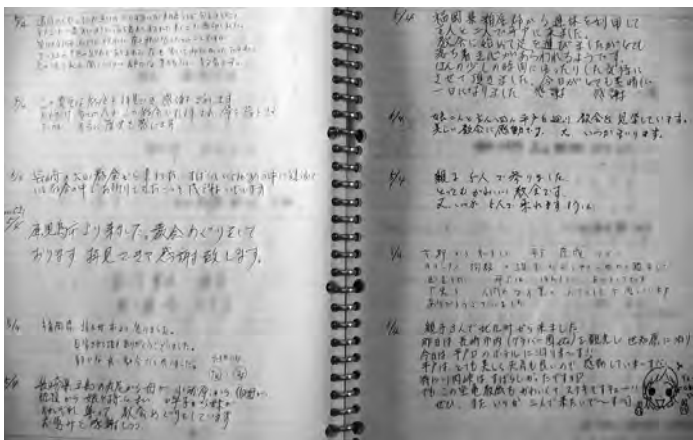
一冊のノート

長崎県には、キリシタンの歴史に裏打ちされた、建築史的にも価値あるレンガ造りや木造の美しい教会が数多く存在するため、教会めぐりをする巡礼者や観光客が絶えない。そのような長崎県の多くの教会の入り口付近には、外部からの訪問客が自由に記帳できる

ノートが置かれている。

長崎県北部のとある教会に置かれたノートを開いてみよう。そのノートに書かれているのは、「すばらしい眺めの中に立てられている教会でお祈りできたことを感謝いたします」という長崎市のカトリック信徒からの寄せ書きや、「京都から来ました。平戸、原城などキリシタン殉教の跡をたどらせていただき旅をさせていただきました。歴史を、人間のなす業のおそろしさをおもっています」というプロテスタント信徒による記述もある。これらにみられる旅は、キリスト教徒が神や殉教者へ祈りを捧げて敬意を表す巡礼と言えるだろう。他にも、東京や大阪などの大都市から、ミッシェン系の学校の生徒が修学旅行として長崎市や平戸、五島列島を訪れる例もある。

しかし、近年これらの教会には、女性を中心に、明らかにキリスト教徒ではない訪問客が増えている。彼女らは都市部に住むOLや、母・娘の親子連れ、年配の女性グループ客などであり、従来の巡礼者とは明らかに異なる人々である。近年のスピリチュアルブームの影響を受けているのかもしれないが、そんなことよりも、素朴な教会の荘厳な雰囲気の中で、背景にあるキリシタンの苦難の歴史



下 平戸の中心部にある聖フランシスコ・ザビエル記念教会。1931年建設。寺院と教会の見える折衷的風景で有名(2007年2月25日) 左 とある教会に置かれた、訪問客が自由に記帳できるノート



に心動かされ、単なる癒しをはるかに超えた体験を得ているようだ。教会に備え付けられたノートに書かれた「教会に初めて足を運びましたが、とても落ち着き心があらわれるようです。ほんの少しの時間にゆつたりとした気持ちにさせて頂きました。今日がとても素晴らしい一日になりました」という感想からそれがうかがわれる。

現代の多様な教会巡礼

このような体験のできる長崎県の教会は、すでに旅行会社によるツアーにも取り込まれている。五島列島を目的地とした東京発のパッケージツアーを2つ紹介しよう(松井2013)。

1つ目はカトリック信者を対象とした巡礼ツアーであり、3泊4日が13万円台で設定され、カトリック神父が随行する。そして、島内の教会をバスで回りながら、教会堂でミサが営まれ、参加者による祈りが捧げられる。2つ目の観光客を対象とするパッケージツアーでも、教会をはじめとするキリシタン関連施設は重要な観光資源であり、教会に椿油や五島うどんなどの名産品を組み合わせ、中高年の女性グループをターゲットとしたツ



3 長串山から平戸島を望む。宣教師を乗せたポルトガル船が行き交った海(2008年12月17日)



4 授産場。1883年竣工。旧出津教助院の中心施設。国指定重要文化財



1 2 長崎市外海の出津教会。1882年建設、ド・ロ神父の設計施工。国指定重要文化財。世界遺産候補「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の13資産の1つ(2006年12月24日)



の期待もなされている。

しかし、世界遺産化には大きな問題もはらむ。ひとたび旅行会社や行政、観光協会の視点から、各所に眠るキリシタン史や教会および信徒の信仰生活に観光「商品」としての新たな価値が付与されると、メディアや観光客などによって都合良く解釈され、その解釈が

グローバルゼーションの深化によって、優勝劣敗の地域間競争が繰り広げられており、長崎もその例外ではない。特にキリシタンが多く居住していた外海や平戸、五島列島は都市部から遠く離れた半島や離島といった辺境の地であり、過疎化が急速に進行している。そのため、他の地域との差別化を図りながら地域活性化することが喫緊の課題となっている。

近年、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」と題して、キリシタン史に裏打ちされた教会を世界文化遺産へ登録することが目指されており、2007年には文化庁からユネスコに推薦される暫定リストに登録された。長崎の観光産業にとって、修学旅行をはじめとする団体旅行が落ち込んでいるため、世界遺産への登録は願ってもないことだろう。教会や信徒にとっても、過疎化が進む中で、観光収入が教会の維持に寄与するかもしれないと

現代社会においては、観光客の嗜好は速いスピードで多様化しており、とある場所や文化が商品化され、消費され、飽きられると、また新たな商品が生み出される、という一連のサイクルが高速回転している。教会が日常生活に密着している長崎においては、世界遺産化と教会や信仰の観光商品化に伴って、教

一人歩きしてしまう。すると、住民や信徒がその新たな価値を守り通すことを押しつけられたり、その価値にそぐわないものは切っ捨てられたり、といった危険が付きまとう。

また、観光客によってもたらされる収入は、主としてホテルや旅行会社などの業者に入る。ことになり、教会を守ってきた信徒には、ゴミ問題や駐車場不足、トイレ清掃など負の側面が押しつけられるだけ、ということにもなりかねない。すでに、長崎の教会観光研究の第一人者である松井圭介は著書の中で、地元のカトリック教徒にとって信仰の場としての教会や儀礼の場としての聖人殉教の地が、観光化によって観光客の個人的な祈りや癒しの場、あるいは四国遍路を見本とした「ながさき巡礼」の創出というような、新しい意味を持った巡礼地として再編されつつあると指摘している(松井2013)。

このように今日、教会やキリシタン史跡が次々と観光商品化されつつあるのは、この地域に共通する危機意識の表れでもある。現在、

アが組まれている。その中には、世界遺産暫定リストに掲載された頭ヶ島教会と青砂ヶ浦教会を巡り、キリシタン洞窟や旧五輪教会などの辺境地にあるキリシタン関連施設に船で立ち寄り、キリシタン墓地で観光客が信者から直接話を聞く、といったセールスポイントが設定されているツアーもある。

また、上五島の複数の教会では、12月中旬に音楽家を招いて「チャーチコンサート」が催されており、島外からもツアーや個人で来島した観光客が訪れ、クリスマスイルミネーションに彩られた教会で信徒と共に賛美歌を合唱する。参加費は無料で各教会とも立ち見客が出るほど盛況である。また、上五島のある民宿では、青砂ヶ浦教会での結婚式ツアーを企画商品として打ち出している。

さらに、韓国から長崎の教会やキリシタン史跡を訪れるキリスト教徒も多い。韓国のキリスト教史は近代以降の200年ほどである。そのため、韓国のキリスト教徒は世界各地の巡礼地を訪れることが多いというが、これらにとって、長崎での「潜伏」という受難の歴史と独自のキリシタン文化は、ヨーロッパの巡礼地とは異なる魅力的なものに映るといえる(松井2013)。

キリシタン史と教会の観光商品化

このように今日、教会やキリシタン史跡が次々と観光商品化されつつあるのは、この地域に共通する危機意識の表れでもある。現在、





4 佐世保市の黒島教会。黒島の信徒全員の献金や労働奉仕によって1902年築。国指定重要文化財、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の13資産のひとつ(2013年8月8日) 5 黒島教会の内部。壁面は下から順にアーケード、トリフォリウム(壁付きアーチ)、高窓(ステンドグラス)の3層構造で、大変珍しい。天井はリブヴォールト(こうもり天井)。アンジェラスの鐘やキリスト像、ステンドグラスはフランス製で建築当時のもの 6 祭壇には有田焼(佐世保市の東隣の磁器産地)のタイルが敷かれている 7 天井やドアの板は、建築時に資金が不足したため、安価な板に信徒が筆で木目を描いたもの。説明するガイドは、黒島で民宿を運営する鶴崎時雄氏で、自身も先祖代々の信徒

会や信徒が強い影響を受ける危険性がどの地域よりも高いと言えるだろう。

長崎の文化層序とキリシタン

古来より日本の玄関口であった長崎には、中国大陸や朝鮮半島、東南アジア、ヨーロッパから様々な文化が流入してきた。多くの文化が時代を経るごとに地層のように堆積した状態を「文化層序」という。400年を超えるキリシタンと教会の史実は、痛ましい出来事が数多く見られたものの、長崎の文化層

序を豊穡なものにしている。分厚く個性的な文化層序を有する長崎にとって、地域固有の歴史は他地域との差別化の格好の材料である。中でも、これまで見過ごされてきたキリシタン史は世界遺産化に伴って一躍注目の的となっている。

そもそも、日本のキリシタン史は、イエズス会のフランシスコ・ザビエルが1549年にキリスト教(カトリック)を伝えたことに始まる。多くのキリシタン大名の庇護下にあつた九州は布教の根拠地となったが、わけでも

長崎は1580年に現在の長崎市中心部が領主の大村純忠からイエズス会に寄進され、多数の教会や慈善病院が設けられて、一説には数万人の信徒を誇ったという。

しかし、江戸時代に入るとキリシタンへの迫害が本格化し、教会はこごとく破壊され、信仰を続けようとする者は捕らえられて拷問を受けたり、処刑されたりした。それでも棄教を選ばない信徒たちは、周囲から隠れて、密かにカトリック信仰を続けることになる。隠れキリシタンの多くは仏教徒とし



12 平戸紐差教会。1929年建設。鉄筋コンクリート。2代目。初代は1885年建設。鉄川与助設計施工(2008年4月22日) 3 佐世保市中心部の三浦町教会。1931年建設(2004年7月)

て振る舞いながら、オラシヨと呼ばれるラテン語由来の祈禱を唱え、信徒仲間の殉教地を聖地として奉り、生まれた子どもに洗礼を授けて、秘密裏に子や孫に信仰を受け継いでいった。

そして幕末の長崎で、世界史的な出来事が起こる。開国後の長崎に居留し始めた外国人カトリック信徒のために、大浦天主堂（国宝指定）が1865年に建てられた。この大浦天主堂に、200年以上も潜伏してきた浦上地区（現長崎市）の隠れキリシタンが現れ、自らがキリシタンであることを外国人神父に告白したのである。

「信徒発見」と呼ばれるこの出来事は、禁教令が明治前後も依然として敷かれていたため、隠れキリシタン組織の大規模な摘発と弾圧に繋がった。しかし、1873年（明治6年）によりやく信仰の自由が認められると、信徒たちは貧しくとも資金を積み立てて供出し、また労力を提供して木材やレンガ、石などの資材を運び、いわば信徒による手作りの教会が各地に建てられていった。結果として長崎県には現在でも132のカトリック教会があり、その数は全国でも抜きんで多い。

このように、長崎県の外海や平戸、五島

列島におけるカトリック信仰は、迫害、潜伏、復活という苦難の道のりを、世代を超えて経験してきた。しかも浦上の信徒はその後、長崎原爆の爆心地をも経験している。過酷な歴史を背負っている分だけ信徒の信仰心は厚く、教会は信徒の日常生活に密着している。

私たちの心をとらえる旅

―「巡礼」と「観光」との関わり―

人は長い人生の折々で、生きていくことに苦しさを味わう。生きていくことの苦しさはおそらく、いつの時代も、宗教・宗派を問わず、普遍的な感情であろう。そうであるからこそ迫害、潜伏、復活を経験した長崎の教会には、信徒であるか否かを問わずそこを訪れる者と苦しみを分かち合い、私たちの傍らに寄り添ってくれる真心の大きさが満ち満ちている。このことこそが、長崎の教会への旅へと人々を駆り立てる大きな動機になっている。これは確かであろう。一方で、長崎の教会は、今、観光商品化の渦中にある。この一見ジレンマとも見える現象について考えることを通して、私たちは「巡礼」と「観光」との関係を探ってゆくことができるだろう。

聖フランシスコ・ザビエル記念教会（平戸市）



参考文献

- 稲垣 勉 2001『観光消費』岡本伸之『観光学入門』有斐閣アルマ
- 海老沢有道 1981『キリシタンの弾圧と抵抗』雄山閣
- 松井圭介 2013『観光戦略としての宗教―長崎の教会群と場所の商品化―』筑波大学出版会
- 宮崎賢太郎 2001『カクレキリシタン：オラシヨ―魂の通奏低音』長崎新聞新書

読書案内

今回の読書案内は、巡礼研究に携わる研究者による自著解説。



巡礼ツーリズムの民族誌
—消費される宗教経験—
門田岳久 著(二〇一三)
森話社(本体五六〇円十税)



聖地巡礼ツーリズム
星野英紀・山中弘・岡本亮輔 編(二〇一三)
弘文堂(二〇〇円十税)

観光と不可分な巡礼

現代の巡礼の最も特徴的な点は、ツーリズム(観光)と不可分になっていることである。人々を集める巡礼地では、ホテルや鉄道が整備されているのはもちろん、そこにいくためのパッケージツアーが旅行会社によって多数用意されている。また一見素朴にみえる巡礼者も、交通機関や宿泊業を利用しない人はなく、旅行雑誌やメディアをフル活用して巡礼を行っている。

しかし巡礼研究と言われる分野では、これまでもっぱら宗教的な側面を研究するばかりで、ツーリズムと結びついた側面についてはきちんと研究されてこなかった。現代的にアレンジされることで、巡礼のどこが変化し、何が持続しているのか。そうした観点から、私は最近二つの著作の出版に携わった。

四国遍路の現在

まず私の単著である『巡礼ツーリズムの民族誌——消費される宗教経験』(森話社、

観

光は今世紀を代表する一大産業になり、世界をますます多くの人が旅するようになっている。それにつれて、最も伝統的な旅のかたちである巡礼もまた盛んになっている。ヨーロッパのサンティアゴ・デ・

コンポステラやルルドは年々巡礼者を増やしており、日本でも四国遍路や熊野古道がブームとなった。近年ではパワースポットやアニメ聖地巡礼といった現象がさかんに雑誌やネットで取り上げられている。

2013年)では、文化人類学・民俗学の観点から、日本の巡礼、とりわけ四国遍路の現在について論じた。現代では巡礼がツアー商品になる一方、完全に娯楽や消費対象になるわけでもなく、地域の習俗としての側面や「お参り」としての意味も残している。それは「巡礼ツーリズム」といふべき、伝統と近代との融合である。私は四国での巡礼ツアーの現場、旅行会社や巡礼者の日常実践の場で参与観察を行うとともに、四国遍路への信仰の篤い佐渡島で、ツアー経験者から聞き書きを行った。本書はツーリズムを介して宗教的世界に関わろうとする人々のエスノグラフィ(民族誌)である。

本書は博士論文をもとにした著書であり、事例分析に加え、いくつかの理論的考察を行っている。最も重視したのは「普通の人々」の宗教的経験を描くということ。1990年代にいくつものカルト事件を経験してきた私たちにとって、「宗教」という響きは必ずしも心地よいものではない。それは多くの人にとって理解不能な「他者」の出来事であろう。他方で、宗教は崇高であり人間存在の根本を規定する至上の価値とする考えもある。

だが本書で描かれる人々は巡礼に対して「カルト」的に没入しているわけでも、崇高な理念を持つて行っているわけでもない。確かに巡礼

を通じて熱心に拝んではいるが、没入の度合いはそれほどでもなく、時に信仰なのか観光なのか分からなくなってくる。それは「他者」と突き放せるほど遠い世界の話ではなく、いうなれば「私たち」の日常感覚で捉えられる範囲の話である。日常性の中で宗教の掬がりを捉えること、それは私の考える民俗学的視点であると言える。

聖地をめぐる動向

もうひとつは宗教社会学を専攻する人たちが集まって編んだ『聖地巡礼ツーリズム』(星野英紀・山中弘・岡本亮輔編、弘文堂、2012年)である。右記の単著が人々の宗教経験や内面に焦点をあてた内容であったのに対して、本書は聖地という場所をめぐる動向に焦点があてられている。つまり現在聖地とみなされ、多くの人を集めている場所がどのような歴史をたどって現在の姿に至ったのかを、宗教的な観点だけでなく、ツーリズムや政治状況にも焦点をあてて描いたものである。

取り上げられている場所は世界50カ所に上る。その中で私は「四国遍路」に加え、世界文化遺産にも指定されている沖縄の聖地「斎場御嶽(せーふあうたき)」、それに律令時代以来多くの貴人が流され、独自の宗教性を蓄積してき

た「佐渡」を執筆している。これまで宗教学では、聖地がなぜ存在するのかという点、その場所自体が強い宗教的な力を有しているからだと考えたり、あるいは「天孫降臨」のように、ある場所に強い力を持った霊的存在が偶然降り立ってできたと考えてきた。いずれにせよ人間の力をはるかに超越したパワーに結びつくことが、聖地成立の要件だと考えてきたのである。

しかし現在聖地と言われている場所は必ずしもそればかりではない。より現実的な、人間の営みの中で作られてきた場所が多い。本書の掲載事例でいえば、アウシユピッツやニューヨークのグラウンドゼロ、御巣鷹山は人為的な悲劇を鎮魂するために多くの人が訪れる場所となっている。また毛沢東の生誕地やバングラデシユの聖者廟は、歴史に名を残す個人への崇拜がもたくなった聖地であるし、巨大大仏として知られる牛久大仏やアニメの聖地と呼ばれる今戸神社は、メディアの力抜きには語れない。

本書はこのように聖地というには意外な場所も多く取り上げている。それを通じ、現代の人々が何を「聖なるもの」と捉えているかを知ることができ、結果として宗教と観光の接合という、極めて現代的なテーマへと読者を誘う。

(門田岳久)

観光学部アカデミックアドバイザー講演会 日韓における「海女観光」の現状

岩手県久慈市小袖地区を舞台に、1959年、ラジオドラマ『北限の海女』が放送されて以降、この地域の海女は「北限の海女」と称されるようになり、注目を浴びてきた。

2011年の東日本大震災によって、久慈市も大きな被害を受けた。震災から1年後、海には魚介類が戻ってきている。今年はNHKの朝の連続ドラマ『あまちゃん』の影響で、多くの観光客が小袖地区を訪ねてくるようになった。

小袖地区の「海女センター」では、7月から9月まで、『ウニ素潜り漁』の実演しながら観光客を呼び込んでいる。

日本で昔から海女が多く分布し、活躍してきた地域としては、三重県鳥羽志摩地域がある。今でも1000人近くの海女が海女漁を営んでいる。

鳥羽志摩地域では、観光用の「海女小屋」を運営し、観光客を受け入れている。実際の「海女小屋」は、海女漁の後に冷えた身体を暖める休憩室のことであるが、観光用の「海女小屋」では、海女さんに海の話聞きながら、海女達が獲った魚介類をその



2013年6月21日(金)
新座キャンパス4号館2階N421教室
講師 劉亨淑氏(韓国・東義大学校
ホテル・コンベンション 経営学科副教授)



三重県鳥羽市相差町にある「海女小屋 相差かまど」では、観光客が海女さんの身体を休める小屋で話を聞きながら、食事が楽しめる

場で食べることができる。鳥羽志摩地域では、鳥羽市や志摩市の観光協会、また個人が「海女小屋」体験プログラムを運営している。特に答志島の「島の旅社」という地元団体によって運営されている「海女小屋」では、2004年に実施された路地裏散策や「海女小屋」体験のモニターツアー以降、年間500〜600人の観光客が訪れている。

全国の海女関連のお祭りとしては、しろんご祭り(鳥羽市)、潮かけ祭り(志摩市)、白浜海女祭り(南房総市)、海女フェスティバル(久慈市)などがあり、海女漁及び海女文化を普及させている。

一方、韓国では海女漁は「裸潜漁業」という。「裸潜漁業」は水産業の中では「申告漁業」にあたり、登録されている海女さんの数は日本に比べると多い。

韓国では、韓半島の全海岸に海女漁は分布しているが、特に済州島で盛んであるため、海女博物館や海女体験学校及び体験プログラム、海女の家、海女村、海女祭りなどが設けられている。

今後の課題として、日韓両国ともに後継者不足が深刻になっている。(劉亨淑)

韓国の「海女観光」

済州特別自治島の海女について

済州島の海岸の村には昔から多かれ少なかれ海女がいた。済州海女は勤勉で忍耐強く、済州女性の典型であるといわれるが、1950年代には20,000人、1970年代には15,000人、現在では5,000人ほどになっている。1970年代から済州島における漁労道具や市場の変化、経済成長による女性への教育機会の拡大や高い進学率などで海女人口は減少し、若い世代の後継者が急激に減っている状況である。

済州特別自治島は、「済州海女」をユネスコの世界無形文化遺産として申請する計画を立てている。
(劉亨淑)



1 韓国済州島にはたくさんの海女観光施設がある。済州海女博物館



2 海女の家



4 海女観光にまつわる様々なプログラムも用意されている



3 海女銅像



5 2011年に開催された第4回済州海女祝祭の様子

観光学部アカデミックアドバイザー講演会 中山大学旅遊学院(観光学部)の教育

2013年7月16日(火)
新座キャンパス4号館3階N431教室

立教大学観光学部は、アカデミックアドバイザー講演会「中山大学旅遊学院(観光学部)の教育」を開催し、中国・広州から来日中の中山大学旅遊学院講師・馬紅氏並びに助教・張科氏から中山大学における観光教育の方法、目標、教育効果などについてお話しいただきました。



本学部は、同学院と2006年に学部間協定を締結し、以来、積極的に教育研究上の交流を行っています。

講演後の質疑応答の際には、学生交流プログラムによって来日した中山大学の学生4名にも加わっていただきました。本学学生からの質問に対し、流暢な日本語や英語で回答がなされ、中国における観光教育の特徴を知る貴重な機会となりました。

最近の観光学部講演会・シンポジウム

開催日	講演者	演題
2012 11/20	小川 尚志 一般社団法人 B級ご当地グルメまちおこし団体連絡協議会	B1グランプリの誤解と本質
2013 4/6	玉野井 雅美 フォーシズンズホテル丸の内東京 セールスマネージャー	観光学部で学んだ決断力
6/21	劉亨淑 韓国・東義大学校 ホテル・コンベンション 経営学科 副教授	日韓における『海女観光』の現状
7/16	馬紅 中国・中山大学旅遊学院 講師 張科 中国・中山大学旅遊学院 助教	中山大学旅遊学院(観光学部)の教育
9/28	(共催・新座市) 小沢 健市 立教大学観光学部観光学科教授	世界遺産としての古都Luang Prabangの変遷と観光の古都への影響
10/5	(共催・新座市) 稲垣 勉 立教大学観光学部交流文化学科教授	近代リゾートの淵源を訪ねて — 植民地がつくり出した山上都市・ヒルステーション —
10/9	ケーオキッサダーン・パッチャラポーン タマサート大学教養学部 専任講師	私の留学体験 — 異文化の下で学ぶ

次号予告

2014年3月刊行予定

特集

おみやげ

交流文化

14

2013年11月20日発行

発行人 村上和夫
編集人 大橋健一

デザイン 望月昭秀
印刷 千代田巧芸社

問い合わせ先

立教大学観光学部

〒352-8558 埼玉県新座市北野 1-2-26

TEL 048-471-7375

<http://www.rikkyo.ac.jp/tourism>

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

©2013 Rikkyo University, College of Tourism.

Printed in Japan.

ISBN 978-4-9905878-0-2

筆者紹介 (50音順)

門田岳久 (かどた・たけひさ)

観光学部助教

東京都立大学人文学部社会学科卒業。東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻文化人類学コース博士課程修了。博士(学術)。日本学術振興会特別研究員を経て、2012年より現職。単著に『巡礼ツーリズムの民族誌—消費される宗教経験』、共著に『宗教と社会のフロンティア—宗教社会学からみる現代日本』、『聖地巡礼ツーリズム』、『来たるべき人類学3 宗教の人類学』、『都市の暮らしの民俗学1 都市とふるさと』。近年は沖縄の聖地観光について研究を進めている。

佐藤大祐 (さとう・だいすけ)

観光学部准教授

2003年筑波大学大学院地球科学研究科修了、博士(理学)。長崎国際大学国際観光学科講師を経て2009年より現職。専門は観光地理学(対象は海岸・高原のリゾート、文化伝播)。主な著書に『地域調査ことはじめ—あるく・みる・かく—』(共著)『観光の空間—視点とアプローチ—』(共著)など。

内藤順子 (ないとう・じゅんこ)

観光学部兼任講師

早稲田大学理工学術院創造理工学部専任講師

2007年九州大学大学院人間環境学府単位取得退学、日本学術振興会特別研究員(PD)、立教大学観光学部助教を経て2013年より現職。専門は文化人類学(都市、観光、宗教、開発)。フィールドはラテンアメリカおよびスペイン、主な著書に『「境界」のいまを生きる』(共編著)、『支援のフィールドワーク』(共著)など。

2014年度 立教大学観光研究所 公開講座

立教大学観光研究所では、以下の2つの
観光産業の入門的公開講座を実施しています。
学生はもちろん、社会人の方々にも広く受講頂けます。

旅行業講座

「国内旅行業務取扱管理者試験」
「総合旅行業務取扱管理者試験」
のための準備講座

(2014年4月開講7月講義終了)

「旅行業講座」は、毎年10月に全国で行われる国家試験「総合旅行業務取扱管理者試験」とそれに先立ち9月に行われる「国内旅行業務取扱管理者試験」のための準備講座です。旅行業界とその業務に関心を持つ人たちが受講しています。旅行業に必要な専門的、かつ実際の知識を一流の講師陣が、実務経験のない人にもわかりやすく講義します。講義内容は、旅行業法から海外・国内観光資源、旅行実務などの幅広い分野を扱います。

ホスピタリティ・マネジメント講座

宿泊・外食産業の理論と経営、最新動向を学ぶ

(2014年9月開講12月講義終了)

ホテル・旅館業・外食産業を中心とするサービス産業を、今日「ホスピタリティ産業」と呼んでいます。「ホスピタリティ・マネジメント講座」では、ホスピタリティ産業の基本理念から、マネジメントの基礎理論、マーケティング、人事、営業企画、法律、最新の業界動向といった幅広い分野まで、業界の第一線の実務家を講師に招いて講義を行います。

講座に関する問い合わせは

立教大学観光研究所事務局

〒171-8501
東京都豊島区西池袋3-34-1 12号館2F
TEL 03-3985-2577 FAX 03-3985-0279
Email: kanken@rikkyo.ac.jp
<http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/IT/>



立教大学観光学部

観光学科 / 交流文化学科

立教大学観光学部は観光学科と交流文化学科の2学科体制です。フィールドを世界に広げ、リアリティに満ちた学びの場を提供するオンリーワンの観光教育を目指します。



立教大学観光学部

〒352-8558
埼玉県新座市北野1-2-26
TEL 048-471-7375

学部の紹介や入学案内については

<http://www.rikkyo.ac.jp/tourism>